

## 同期型遠隔授業のメリットと弊害

社会科専修 川瀬久美子

### 1. 授業の概要

現代社会を理解し、地域社会を形成していくためには、その場所毎に固有の地域性について理解しておく必要がある。本授業の目的は、統計や地図など客観的な資料に基づいて地域性を分析する能力を身につけることである。

例年対面形式で実施している方法を、今年度は、以下のように同期型遠隔授業の形式に変更した。

日本を北海道、東北、関東（首都圏）、関東（郊外）、北陸、東海、近畿、四国・中国、九州、南西諸島に地域区分し、各地域の自然地理・人文地理を説明する地図や統計を資料（A4 サイズ 2 枚）として、教員が moodle で事前配布する。毎回、担当者 2 名が、その資料や追加資料を用いて、地域概要とその地域で特徴的に見られる事象（トピック）について、報告を準備する。報告者以外の受講生は、事前の配布資料を読み取りながら地域概要を説明する小レポート（A4 サイズ用紙、800 字程度）を時間外学習として行い、授業実施時間までに moodle に提出する。

授業では教員が司会進行役となり、前半は報告者による発表、後半は受講生からの質疑とし、場合によっては教員が補足説明に加わる。質問はチャットで受け付け、司会役の教員が報告者に回答を促した。

成績評価は、受講生自身が報告者となった際の報告内容や質疑への回答など（40 点）、地域概要の小レポート（40 点）、他の人の報告への積極的な質問・コメント（20 点）とした。

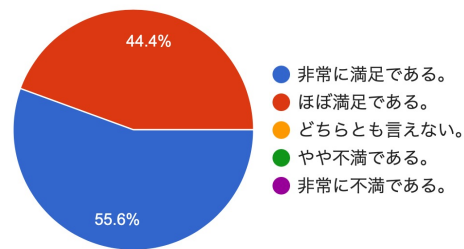
なお、今年度の受講生は 16 名だったため、10 回の上記のような授業の際に、4 回は教員が報告者 1 名とペアを組んで、地域概要部分を担当して報告した。また、この他に松山市内を歩くミニフィールドワークを実施したが、これについては本報告では割愛する。

### 2. アンケート結果

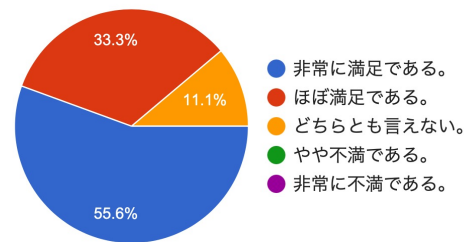
授業について、Google フォームを用いて、

最終回にアンケートを実施した。受講生 16 名のうち、アンケート実施日の出席者は 15 名で、授業の冒頭にアンケート回答時間を設けた。また、moodle 上でもアンケート未回答者に回答を呼びかけた。回答者は 9 名であり、この回答者数については後述する。

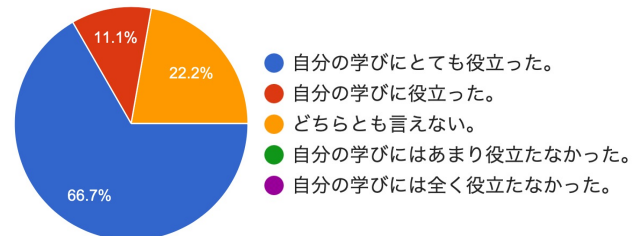
(1) この授業の全体的な満足度について、あなたの考えに近いものを一つ選んで下さい。



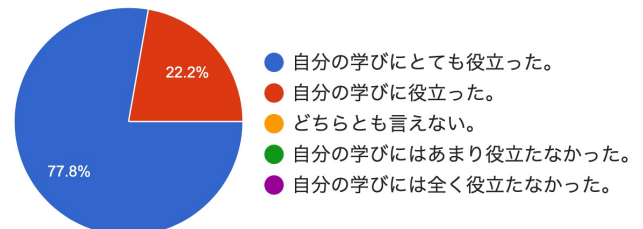
(2) 担当者が報告して質疑応答するという授業全体の形式について、あなたの考えに近いものを一つ選んで下さい。



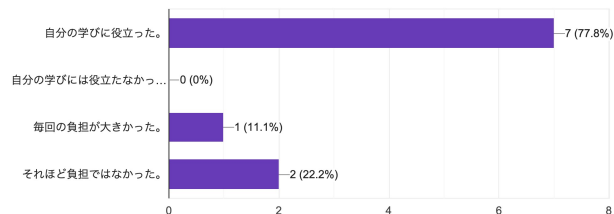
(3) 二人ペアになって地域概要とテーマ報告を担当したことは、あなたの学びに役立ちましたか。



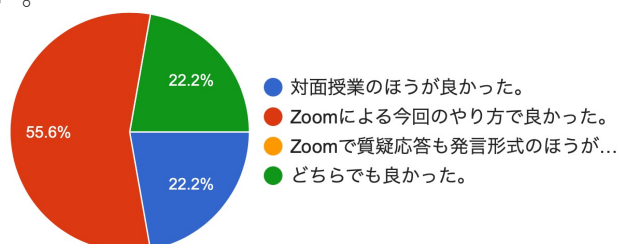
(4) 地域ごとに担当者の報告を聞いて質疑応答に参加することは、あなたの学びに役立ちましたか。



(5) 時間外学習（地域概要について事前配布された資料を読み取り moodle で提出する）について、あなたの考えに近いものを選んで下さい（複数回答可）。



(6) Zoom によるこの授業の実施方式について、あなたの考えに近いものを一つ選んで下さい。



(7) この授業の内容や実施方法について、取り扱って欲しい内容や改善点を一つ以上提案して下さい。

- ・毎回の時間外学習は大変、とか。
- ・テーマ発表について、今回のようにあらかじめテーマを決められている形もよかったが、テーマを自由に設定できる形も試してみたい。
- ・日本全体で比較した話を取り上げること。
- ・地域同士の関わり
- ・対面授業でやはり受けたかったです。
- ・特になし（3名）

### 3. 同期型遠隔授業のメリット

Google フォームのアンケート結果からは、今年度の同期型遠隔授業が受講生にとって概ね好評であり、学習効果について受講生自身の手応えがあったと推測される。今回の形式がなぜ受講生に肯定的に支持されたのか、具体的に質問はしていないが、以下のようなことが推測できる。

- ・通学時間の短縮
- ・チャットによる全員参加の質疑応答（報告に対する質問・コメントは受講生全員に記入させるよう指示していた）

まず、通学時間の短縮が出来たことは、例年、冬場の2限（さらに以前は1限だった）

時間帯だったため、遅刻者や欠席者が少なからずおり、ひどい時には受講生の5分の4が欠席・遅刻ということもあった。しかし、同期型遠隔授業の今回の出席率は概ね9割と改善した。

また、チャットによる質問・コメントについては、対面授業でも基本的に受講生全員が毎回発言できるよう司会進行をしていたが、チャットの記入では例年より質問内容が精査されていたり、補足コメントが充実していた印象がある。

一方、教員の立場からは、今回の同期型遠隔授業のメリットとして、資料配布のしやすさを指摘しておく。本授業では地理教育における資料活用能力の育成が狙いの一つであり、適切な地図や図表を念頭に置いた資料作成を呼びかけている。受講生の場合、ほとんどの図表はインターネットから借用したもので（当然、出典 URL は明記させる）、カラー図版も多い。昨年度までは moodle やメールで提出された報告者の資料を、教員が印刷して配布していたため、紙面スペースや印刷解像度の問題で、小さくて見辛かったり色の判別が難しいことがたびたびあった。しかし、デジタルで資料を共有することが可能となったため、カラー図版は全く問題なく使用でき、小さな図表もタブレットやパソコン画面で拡大して見られるようになった。

ただし、これは資料のデジタル化の問題であり、対面授業でも受講生が各自ノート PC やタブレット端末を教室に持ち込み、moodle にアップされている資料を手元で閲覧することが可能である。

### 4. 同期型遠隔授業の弊害

授業時間中は基本的に教員と報告者以外は、カメラとマイクをオフにして参加させていた。後期午前中の授業時間だったため、自宅から身なりを整えずに参加している受講生もいると推測されたためである。しかし、当然、授業に参加しているフリで、実際には参加しない学生の出現が想定された。そのため、授業の途中（地域の概要報告とトピックの報告の間）に、そこまでの報告に関するごく簡単な質問や、対象としている地域について知っていることや訪問したことがある場所を挙げてもらうなど、司会の教員が指示して全員がチャットに記入する時間を必ず設

けた。仮にそこで記入がない場合は、出席扱いにしないと受講生には事前に告知している。また、授業後半の質疑応答のチャット記入がない場合も、同様に欠席扱いにするとした。

実際には、司会が質問を投げかけ（質問をその場でチャットにアップする）、ほとんどの受講生が記入し、報告者が次の説明に入ったりかなり時間が経過してから記入する受講生が数名いた。明らかにリアルタイムで報告者の説明など聞かず、自分のペースでチャットを確認して書き込んでいた。

また、2回、教員が授業の終了を宣言して、次々と受講生が退出したのに、ずっと退出せずに残っている受講生がいた。結果的に1時間以上居残っており、明らかに何らかの理由で授業に参加していなかった。このうち1名については、次の回の終了時に教育的指導を個別に行なった（もう1回は最終回だったため、指導の機会がなかった）。

結局、授業に参加している風で授業冒頭の教員の説明さえ聞いていないことが、アンケート実施で形となって現れた。Google フォームでのアンケートの回答を、授業冒頭と、途中のチャット記入の時間（本来の授業内容に関する記入を終えた学生で、未回答の学生は回答してほしいと要請）、授業終了時と、計3回呼びかけたにも関わらず、15名中9名しか回答がなかったのは、筆者自身衝撃であった。

いかに実質的に授業に参加させるか。これは遠隔授業の大きな課題であるが、現時点では考えられる対策はとっており、新たな方策を見つけれられていない。

一方、報告者以外が毎回提出する地域概要のレポート提出も、16名の受講生のうち毎回8～13名は授業開始時刻までにmoodleに提出するが、ほとんど提出しなかった受講生もいた。小レポート提出が成績評価の対象であるため、期日を過ぎて提出した場合でも、本来の評価から低くするものの、評価対象とした。しかし、この小レポートの本来の目的は、報告者以外も事前配布の資料を読み取ったり、そこで覚えた疑問を各自調べたりすることで、担当者の報告内容の理解の助けになったり、場合によっては質疑応答で報告者が答えられなかった質問に対しても、別の受講生が事前学習で得た知識で回答をフォローする、というようなピア・ラーニングの効果を狙っ

たものである。つまり、「事前」であることに非常に意味がある。

例年の対面授業では、小レポートは紙媒体で作成させ（手書きか PC で作成したものを印刷して持参）、授業の冒頭で二人ペアとなって内容を述べあるということをしてきた。したがって、（内容の出来不出来はともかく）授業に出席する受講生は必ず小レポートを持参していた。そうしないと、他の受講生がペアとなって活動しているのに独り手持ち無沙汰となり、居た堪れないため小レポートを作成するようになる。それが、今回の遠隔授業では実施が難しかったため、小レポートは教員が moodle 上で確認するだけとした。結果として、事前学習をせずに授業に参加する学生が現れた。

これについては、遠隔授業でもブレイクアウトルームを使って、授業時に全員が各自の事前学習の成果を表せる場を作ることで、解決出来ると考えられる。

## 5. 今後に向けた

新型コロナウイルス感染問題の対策で同期型遠隔授業となった今回の授業を振り返り、メリットと弊害を整理した。弊害については、解決出来そうな部分と、効果的な対策を見出せていない部分がある。一方、メリットについては、対面授業においても生かせる点（デジタル資料の共有）がある。日常的な授業時間にタブレットやノートPCを活用していくことは、今後の高等教育で普通に行われていくと予想されるし、初等教育・中等教育でも同様と考えられる。教員を目指す学生がほとんどである本学部の授業でも、積極的にICTを活用していきたい。